

*The Journal of
The Japan
Menopause Society*

日本更年期医学会雑誌

第22回 学術集会
プログラム・要旨集



The Japan Menopause Society

VOL. **15**
SUPPLEMENT
OCTOBER 2007

サイエンスとしての漢方療法

慶應義塾大学医学部漢方医学講座

渡辺 賢治

略歴		フェロー
1984	慶應義塾大学医学部卒業 内科学教室入局	1995 北里研究所東洋医学総合研究所
1986	足利赤十字病院内科	2001 慶應義塾大学医学部東洋医学講座助教授(現漢方医学講座准教授)
1988	慶應義塾大学医学部内科学教室助手	
1990	東海大学医学部免疫学教室助手	
1991	米国スタンフォード大学遺伝学教室ポストドクトラルフェロー	
1993	米国スタンフォードリサーチインスティテュート分子細胞学教室ポストドクトラル	

漢方治療は科学的ではないとの批判がある。経験に基づいて発展したもので科学的に証明されていないから、という理由であるが、それでは西洋薬は完璧に作用機序が解明されているであろうか。例えばステロイドはどうであろうか。他にも経験的に使用されてきた薬剤は枚挙に暇がない。そもそも医療に科学的要素が入ってきたのはここ100年くらいで、長い伝統の中で治療は経験に基づいて行われてきた。逆に言えばわれわれ医師は科学的根拠がないからと言って医療現場から経験をはずすことはしてこなかった。何故ならば、病んだ患者を治すことが医師としての使命である以上、作用機序が明らかでなくとも効果のあるものは使用するのだからである。

漢方薬は現在7割以上の医師が日常診療で用いているが、それは効果を実感しているからであろう。だからといって科学的解明を怠っては漢方の進歩もない。わが国では医療用漢方製剤として30年の歴史がある。この30年の間に実は科学的解明はかなり為されているのであるが、多くが薬学系による仕事であるために、医師には知られていない事実も多数ある。本発表ではこうした科学的機序の明らかとなりつつある漢方の現状について述べさせていただく。

まずは漢方薬を理解する上で、その成分には低分子成分、配糖体、多糖体の別のあることを知ることが重要である。これらの成分はそれぞれ吸収形態が異なり、作用時間発現時間も異なる。よく漢方薬は速効性がない、と誤解されているが、低分子成分は10分くらいで血中濃度が上がりはじめ作用は早い。一方で配糖体、多糖成分は腸内細菌を利用しないと吸収されず、また腸内細菌を変化させることで生体遺伝子発現も変わる。漢方薬が腸内細菌をうまく利用しながら作用していることも分かりつつある。

こうした作用機序を知った上で改めて漢方薬を用いると、患者の反応について理解が深まり治療効果が高まる。また、生薬レベルでの作用をも理解することで、作用とともに副作用の理解も深まるので、重篤な副作用を避けることができる。漢方薬の作用機序を知るとは医療現場における治療効果をより一層高める上にも重要なことと考える。